

【第2回】 テキスト (目次)

エッセイを書くことは、豊かで楽しいこと。

字数制限について

メリット、デメリット／要点の整理／プロットの取捨選択／体言止めの注意

エッセイを書く意義

書き出すことと読み直すこと／客観視の重要性

クリアな視点の獲得

邪魔している思い込みのプログラム／絵でも使えない色がある
／使えない言葉とは

人に読んでもらうというスタンス

日記とエッセイとの違い／手紙やメールとエッセイとの共通点

量を書く意義

書けば急速に上手になっていく／視点やアイデアも変化する
／文章は必ず上手くなる

起承転結の変形

起承転結は同じ長さではない／変形でもOK

紀行文とエッセイ

旅の説明と気分の説明／自分の目で見て感じたこと／人の心とのふれあい

自分らしさの表現方法

自分とは何か／好ましい自分、好ましくない自分

面白いエッセイ

面白くないエッセイ／批判は聞きたくない／威張っているのも聞きたくない

プライバシーの保護

プライバシー保護は常識／相手の立場になって考える

(第二回テキスト)

【201】 字数制限について

(メリット、デメリット)

エッセイを書く場合に、よく字数制限とういものに出会います。エッセイは本来書きたいことを、書きたいように、長さも自由に書くのが良いのですが、雑誌に掲載されたり、文集に綴られたり、懸賞に応募しようとする、紙面の関係で、どうしても字数制限が必要になってきます。

多くは、400字詰め原稿用紙3枚とか4枚という指定の方法ですが、最近では、1000字以内とか、1500字以内という指定も多くなってきました。

さて、テーマを与えられて、おおよそのプロットを考えて、いざ書き始めると、どんどん筆が進んでしまい、書き終わってみると、字数制限をオーバーしているということもよくあることです。そうすると、オーバーした文字数を減らすために、いろいろな創意や、工夫をすることになります。

とりあえずは、冗長な文章や、不要な言い回しなどは、削ったり短縮したりします。

しかし、それには限界がありますので、文章の表現や言い回し以前の、エッセイの構成と言った方が良くと思いますが、今度は、そのエッセイの構成を見直すこともやってみなければなりません。

今回は、まずこの構成を見直す際のヒントからお話しします。

制限字数をオーバーしているということは、単純に言えば、書きたいことが、制限された字数よりは多かったということです。

ある程度推敲して、文章をスリムにしてもまだ、オーバーしている場合、というか、エッセイを書き込んでいくとそうなることが多いですが、そのような場合は、それ以上、文章を「推敲して短くする」のは、あまりよくありません。

それよりは、書きたいことを整理をして、書かなければならないこと、書かなくてもよいことに分けることをしてみるべきです。その方が、文章を短くする作業がはかどります。

しかし、この作業は、せつかく書いた「面白い見方」や「面白い発想」を削除することになりかねません。これがなかなか辛い作業になります。

しかし、この作業をすることによって、読む人から見れば読みやすい、すっきりしたエッセイに仕上がるわけです。その一つのエッセイに不必要なことは、たとえ面白いことであっても、たとえためになることであっても、あえて言わないということです。

最近の映画のビデオとかDVDを、鑑賞すると、付録にNG特集とか、カットされた場面とかがおまけについています。映画を鑑賞したあとに、それらをまた違った雰囲気で見ると、なかなかおもしろいものです。

そして、おまけの解説の中には、カットした場面について、監督自ら、コメントや理由説明をしているものもあります。

例えば「このカットしたシーンはですね、実はとても面白くて、僕自身も気に入っているのですが、最終的には悩んだ末にカットしました。ここで、このシーンを挿入すれば、少し話が横にずれてしまい、『この先どうなるのだろう』という興味が鈍くなるからです。ここは、ストレートにその疑問をすぐに次々に迫るシーンにしました。全体のテンポの問題もありますからね」などと解説してくれています。

なるほど、そうだなあ、監督はよく考えているんだなあと感心します。でも、カットされたシーンを見てみると、せっかく舞台セットも作って、俳優もよく練習して、とても良く出来ていて、映画の中にあっても少しもおかしくない良い場面のように見えます。しかし、監督は惜しげもなく、あっさり、ぱっさり、カットしている。

もったいないと言えどもったいないのかもしれませんが、それを本編の映画に入れると、映画全体が面白くなるのであれば、潔くカットして良かったのではありませんか。また、そのような優先順位をつけた整理が出来るのが良い監督ということでしょう。

短いエッセイの中でもそれに似たことが起こります。「せっかく書いたのに捨てたくない」という気持ち。この気持ちに打ち克って、きっぱり捨てるというのがポイントですね。

字数制限がなければ、書きたいことがいくらでも全部書けますので、そのような捨てる作業はあまり必要でないかもしれません。

しかし、字数制限があると、要らないものをどんどん捨てますから、逆に、読みやすいポイントのはっきりした、良いエッセイが出来上がるというメリットもあるわけです。

(要点の整理)

さて、そこで、要点の整理の仕方です。

エッセイは論文ではありませんから、要点を整理して理路整然とまとめるというような固いものではありません。文体も自由、言い回しも自由です。

しかし、エッセイ毎にその要点というものは、あります。平たく言えば、一体何が書きたかったのかということです。

あれと、これと、それを書きたいでは、字数をオーバーしてしまいますから、あれか、これか、それかのどれかにしなければならぬということです。

そこで、何が要点で、何が要点でないかを見つけないければなりません。

そこで、要点に、なかなかないものから順に言えば、そのまず第一は「知識」ですね。「蘊蓄」「受け売り」「引用」「聞いたこと」。つまり、自分の意見や自分の意思や感情ではないものです。それらは、エッセイの要点になりにくいですね。

たとえ、誰も知らないような珍しい「蘊蓄」「知識」であったとしても、そしてそれをエッセイに書きたい気持ちが強いとしても、それは、そのエッセイから読み取らなくても、他の情報源から得られるものです。そして、そうであれば、それは、興味が薄くなるということです。とうい、さらに、詳しい情報として知りたければ、もっと、正確な原典に当たりたいと、自然に思うから

なのかもしれません。

ですから、「蘊蓄」や「引用」について、作者がどう考えたり、感じたりしたのかは、興味がありますが、その「蘊蓄」「引用」自体では、興味は引きにくいということです。つまり、「蘊蓄」や「引用」はエッセイの要点には、なかなかなりにくいですね。

要点になりにくいものの、第二は「批判」「非難」「中傷」「軽蔑」などです。確かに、それは「自分の意見」ではありますが、それらは他人の「意見」がまずあって、それを土台にしていますから、いわば、他人の意見の「引用」の延長線上にあるということです。そのうえ、賛成意見なら、本人の意見ですが、反対意見は誰にでもできますし、では、どうするかという本人の意見を表明したことになっていません。

あと、要点になりにくいものは、状況の説明文ですね。エッセイを書くのにどんなエッセイでも、かならず状況の説明はありますが、その部分は要点に導入するために必要な部分ではありますが、要点そのものではないですね。全部省略することはできませんが、その説明に何プロットも割いているようなら、1つ2つ整理しても良いものかもしれません。

さて、このように、自分が書いた文章で、何が要点かを探す場合に、要点になりにくいものをまず、除外していくと、だんだんはつきり、自分の書きたいことが見えてきます。

自分の書きたいことの要点がいくつか見えてきたら、こんどは、それを取捨選択することになります。

(プロットの取捨選択)

プロットとは、日本語では、段落のことです。ひとまとまりの文章のことです。長さは、まちまちですが、だいたい、3～5位のセンテンスが集まったものです。読点が3～5つある文章とも言えます。文字数にして、100～200文字くらいでしょうか。もちろん、それより長い場合も短い場合もありますが、ひとまとまりの意味をもった文章の塊です。

文字制限があって、文章を推敲して、短くして、さらに、要点を整理しても、なかなか制限内にまとまらない場合は、良い映画監督が冗長なシーンをカットするように、その場面全体をカットします。つまり、同じ手法を、エッセイでは、プロットをばっさり丸ごと捨てます。

A,B と続いているプロットを、A を半分に縮めて、B を半分に縮めて、全体を短くしようとするより、A または B のどちらかを、そのまま、まるごと切り捨てる方が、短くした量は同じですが、すっきり上手くいく場合も多いです。その切り捨てた後の文章をあらためて、読み直してみると、前より、断然読みやすくなっていると驚くことも多いですね。

また、私の経験では、何度も何度も書き直しても、上手くいかないプロットがありますが、それは、「ああ、これは、不要なプロットかもしれない」と思って、ばっさり切り捨てたほうが良いことも多いようです。

つまり、何度も書き直しても上手くいかないということは、本心ではあまり書きたくないことであつたり、その場所にそのプロットは不必要であつたりするのでしょうか。小手先になっていたり、無理をしているということです。

あと、捨てるときに、せっかく書いたのに「惜しい」とふと思ってしまうのですが、その「惜しい」と思う心を分析、観照してみましょう。

その中に、「これを書くと、私は賢いと思われるのに」とか「エヘン、どんなもんだい。私はよく知っているでしょう。」みたいなのがあつると、それは、「賢いと思われたい欲」「威張りたい欲」ですし、また、「これを書くと私はアイデアがあつるとされるのに」とか「これを書くと創造力があつるとされる」などがあると、それも認めて欲しい欲です。

それらが、微かにでも残つているプロットは、やはり、読む人からみればすぐに分かります。そして、すぐに「つまらないエッセイ」と思われてしまいます。

ですから、そのような、「自分の欲」が入つているプロットは、どんなに書きたいプロットでも、まっさきに削除対象プロットにすべきものかもしれませんね。「欲」が基調にあるエッセイは読みづらいものです。

「愛」が基調にあれば、たとえ、文章は拙くても読み進んでいけます。

ただし、同じようなことでも、言い回しや、表現、スタンスを変えることによって、「欲」が「欲でなくなる」こともありますから、どうしても言いたいのであれば、いろいろ推敲してみてください。「欲」の立場ではなく、「愛」の立場に立つということです。

(体言止めの注意)

さて、文章を削つて短くしていても、なかなか捨て切れなくて、あと30文字、あと20文字数という微妙な字数がオーバーしている場合は、「体言止」という技術があります。

体言止とは、このすぐ前の文章を例にして実施してみると、次のような体言で止めた文章を多用することです。

【さて、文章を削つて短く。なかなか捨て切れない。もう30文字、20文字という微妙な字数。「体言止」という技術。】

みたいな感じになります。文章の最後の助動詞などを省く方法です。エッセイの中で部分的にそれを使うのは、確かに字数を稼ぐことにもなりますし、また、文章のリズムをアップテンポにしたり、思考の跡を追うような感じになったりと、いろいろ効果的な面もありますが、しかし、これが最初から最後まで使つてあつると、読む方が疲れてしまいます。

実は体言止は、一度読んだ文章を短縮化して再度確認のためなどに読むのはとても、分かりが良くテンポも良いのですが、初めての内容を、体言止で読まされると、とても、疲れるのです。その理由は、助動詞や接続詞が極端に省略されていますから、それを「頭」は補いながら読み進まなければなりません。その「頭」の中の補うという作業が疲れるわけです。

しかし、エッセイを書いて、何度も推敲してる「原作者」は、その文章についてもう何度も何度も読み込んでいますから、話の展開がどうなるのか、十分に知っています。ですから、体言止を多様して文章を圧縮しても、作者自身は、何の苦労もなく、その文章を読むことができますし、「おお、この方が、テンポも良くて読みやすい」と自分ではそう感じてしまいます。

しかし、もう一度言いますが、そのエッセイを読んでもくれる人は、始めてその文章を読むわけですから、作者のように、話の展開がわかっているわけではありません。ですから、いきなり体言止を多様した文章で、でエッセイが書かれていると、とても読みづらく感じてしまうわけです。「何だか、自分だけが分かってるっていう書き方だな。自分勝手な感じだ」と思われてしまいます。

ですから、「体言止め」は、文章を書いていく時に、自然に必要ながあって、書いたものならばOKですが、字数制限クリアーのために、あとから、体言止めを使って無理に圧縮したりしないようにしましょう。それよりは、前にも言いましたが、一番不要な段落を一つ落とした方が、よほど綺麗に行きます。このあたりは、試行錯誤や、実験の繰り返しをして、確かめたり、実感したりしてみてください。

【202】 エッセイを書く意義

(書き出すことと、読み直すこと)

「自分の考え」というのは、とても高速に行われています。「頭」の中で、考えると自分自身がその高速な思考についていけません。ですから、「頭」の中だけで考えていると、考えがまとまらないことが多いですね。

まるで、夢をみているようなものになったりします。しかし、その思考を丁寧に文字に書き出してみると、自分の思考の軌跡がよく分かります。そして、自分の書いた文章を読み直すときは、書いている自分とは違った自分ですから、冷静にそれを読むことができます。

つまり、書き出す作業も、読む作業も、「夢」のような考え、「妄想」のような考えから「目を覚ます」作用があります。考えを整理する作業ですね。

このことを、もう少し詳しくお話します。

(客観視の重要性)

書いている自分と読んでいる自分は異なります。これは、エッセイを書いて、その原稿を、数日後読み直してみるとよく分かります。「あれ、こんなことを考えていたのか」とか「ははー、面白いことを書いている」とか、少し自分自身とは距離のある感じです。時には、まるで、他人が書いた文章に思える場合もあります。日数をおいて読み直してみるとその感じが分かりやすいですが、実は一文一文書いているときにも、それは自然に起っています。

「頭」がものを考えるのは、超高速です。しかし、ものを書くのはたぶん「頭」で考えているスピードの、10分の1くらいでしょう。あるいは、100分の1くらいのスピードでしか、文字にしていけません。

「頭」の速さから比べればとてもゆっくりしたものです。ですから、文字を書いているとき、あるいは、ワープロに打っている場合も同じですが、思考はその文章の延長線上を、行ったり戻ったり、行ったり戻ったり、しながら、次の思考に進んでいます。まるで、参勤交代のお殿様の行進のように、「3歩進んで2歩下がる」方式ですね。

普通「頭」は、「頭」の中だけで思考している場合は、どんどん進むばかりで、もどって来るということはありません。しかも、歩くというより、駆けると言う感じです。この、「駆ける」という「頭」をそのままにしていると、知らず知らずのあいだに、「頭」が勝手に駆けつけた跡を、苦しみながら追いかける人生になってしまいます。人生を「頭」に乗っ取られてしまうわけです。

そして、ご存知のように「頭」は「欲」で疾走していますから、それを追いかけるのは、「愛」を見失うということになりかねません。そこで、豊かで潤いのある人生をおくるためには、「頭」を統制する必要がでてくるわけです。それが、瞑想であったり、毎日の修行であったりしますが、要点は、マインドの観照です。そして、これは、エッセイを書いているときにも実践できるものです。

というか、エッセイを書いているときは、自然に「観照」しながらの作業になっているということです。ですから、例えば、30分くらい熱中してエッセイを書くと、「頭」が疲れるのではなくて、イキイキと活性化されると思います。

「頭」が元気になります。「頭」にとっては、とてもよい運動だからです。「頭」の働きが活発になってくると、日常も楽しくなってきますし、余裕もでてきます。それがまた良いエッセイを書く原動力にもなってきます。

【203】 クリアーな視点の獲得

(邪魔している思い込みのプログラム)

さて、自分を観照しながら、なるべく「無欲」になってクリアーな視点でエッセイを書いているつもりでも、自分では気がつかない思い込みのプログラムが、邪魔をしている場合があります。

それは、まるで、色眼鏡を掛けているのですがそのことを忘れてしまって、世の中はこんな色なのだと思っているようなものです。当然、エッセイの中にその色が濃く出てきます。でも自分ではそれはそのように本当に見えたのだと思っている場合があります。

そのような見方は一面、個性的だということもできますが、その色眼鏡が濃ければ、微細なところは見えないかもしれません。できることなら、色眼鏡を外してまず素材をそのまま観察して、そして、もし、演出や効果が必要なら、その後から、水彩絵の具でちょっと色をつけるという方が良いでしょう。

つまり、ここで例えに使っている色眼鏡とは、自分の思い込み、予断、決めつけのようなものです。分かり易い例では、「何々は、こうあらねばならない」だとか「何々はこうすべきではない」などの価値判断や、「どうせ、何々はこうなのだ」とか「何々のくせに」などという、頑固な決め付けなどです。

これらがあると、エッセイは柔軟性がなくなります。自由闊達ではなくなります。

ですから、そのような思いこみがあるとしたら、まず、それを除去することが大切です。でも、先に述べた例のようなはっきりした思い込みであれば分かり易いですが、その思い込みを自分でも忘れていたら、どうやって除去すればいいのかわかりませんね。

自分の持っている思い込みをどうやって発見するか、その方法を次にお話しします。

(絵でも使えない色がある)

私は、絵も好きで昔から絵も描いていますが、どうも苦手な、なかなか使えない色がありました。例えば24色の水彩絵の具を買って来ても、茶色がいつも余ってしまい、青とか他の色はすぐになくなるのです。茶色が使えない。茶色ばかりが残る。

もったいないですね。そこで、その残った大量の茶色の絵の具を全部つかって、茶色主体の絵を描いてみますが、とても汚くて自分の好きな絵にはなりません。「どうも、茶色は嫌いだ」とどうしても思ってしまう。

しかし、ある時、この「茶色は汚い色」だという自分自身の思い込みから自由になれば、茶色もきっと、使えるのだらうかと、思いました。

実は、茶色も、赤も、青も、灰色も、みんな、単なる色なのです。画用紙に塗られた周りの色と違いやハーモニーをかもし出しているそれぞれ個性のある色なのです。

色そのものに綺麗な色とか、汚い色とかがあるわけではなく、単に他と違う色だと言うことです。

例えば、絵を描いていて、「この空いた隙間に何色を塗ろうかな」と思ったとしますね。絵の具をざっと見渡した時に、ふと「茶色は汚い」が起動しかかったら、すかさず、「でもなぜ？」とそこで止まってみます。「汚い」の延長線上に「頭」が疾走して「汚いから茶色は使わない」に行かないように、細心の注意をする。つまり、自分の心を観照する。

なぜ、茶色は汚いと「頭」は覚えてしまったのか、それは知りません。知れば「ああ、そういうことか」と納得できるかもしれませんが、それは思い出すのが難しいですね。でも、知らなくても良いのです。必要なことは、「茶色は汚い」というプログラムから、次の、だから「使わない」に行かないことができればそれで良いわけです。

例えば、画用紙のその空間に茶色が入れば周りの、例えば黄色がさらに鮮やかに見えるのであれば、それはそれで意味があります。茶色をすーっと塗り込みます。ぐっと絵に深みができました。大成功です。

色には、実際は汚いも綺麗もないのです。ただ、周囲とのバランスや影響し合う関係があるだけです。

ちょっと話がわき道にそれてしまいましたが、使えないと思っていた色も、不要なプログラムを起動させなければ、使えるようになるということです。

そして、使えるようになれば、絵も一段と良くなりますし、自分の心も一段と自由になれます。

これは、エッセイでも同じです。次にそれをお話ししますが、もう一度復習すると、まず、「使えない色」があることに気付くこと。そしてそれについての「プログラムがある」ことをまず認める。どんなプログラムか知りませんが、とにかく有るということです。

つぎに、そのプログラムに無意識に使われないぞと注意深く、「覚めて」いるということです。

すると、そのうち、そのプログラムは、無意識で起動しなくなってきました。最終的には、そのプログラムは、お蔵入りになるのだと思います。

(使えない言葉とは)

同じようなことがエッセイを書いていくときにも起ります。「使えない言葉」です。自分の心の中のプログラムを観照するのに、とても便利です。是非、それを注意深く探ってみてください。どうしても、使いたくない、嫌いな言葉というのを見つけてみるということです。絵の具ですと、量が減らないので、どれが使わない色なのかよくわかりますが、使われない言葉というものは、発見するのが難しいですね。

実は、使われない言葉ではなくて、使われない言い回しと考えてください。言い回しに色があるのです。

例えば、何か自分の意見を表現するのに、「○○だと思います」「○○かもしれません」「○○に違いない」「○○である」「○○と言えると思います」など、色々ですね。

これは、その意見を言っている人の、自信や確信の強さと、遠慮や謙遜などの入り交じったところが現れてきます。その微妙な均衡点を無意識で決定するのではなく、この部分を意識してみてください。「○○と言えないことはないと思います」から「断固として○○です」くらいまで、幅が出てきます。

自分の言い方のクセとして、遠慮や謙遜が勝っているのか、押し出しやアピール系が勝っているのか、そのどれでもないところ、自分の欲のないところが、本当の所ですから、まず、この言い回しを「覚めた」心で観照してみてください。

遠慮もしないが、押し出しもしないと言う点を探ってみるということです。

一度書いた文章の、その言い回しのところだけ、故意にどちらかに傾けて書き直してみるとよく分かります。「あれ、なんだか、これは自分の文章ではないな」という感じになることもあると思います。

逆に言うとそれほど、自分の言い回し、つまりは、表現にたいする姿勢は変えにくいのだということです。それは何度もいいますが、一面、個性ではあります、無意識ではいけないということです。

試しに直前のプロットで言い回しを変えてみましょう。

こうなります。

【一度書いた文章の、その言い回しのところだけ、故意にどちらかに傾けて書き直してみるとよく分かるのではないのでしょうか。「あれ、なんだか、これは自分の文章ではないな」という感じになることもあるのではないのでしょうか。

逆に言うとそれほど、自分の言い回し、つまりは、表現にたいする姿勢は変えにくいのだということなのではないのでしょうか。それは何度もいいますが、一面、個性ではありますが、無意識ではいけないということなのではないのでしょうか。】

ちょっと極端に変えてみましたが、このように、言い回しが無意識になっていると、読む方は、ちょっと引いてしまいますね。それをチェックしましょう。そこに、自分の人生に対するスタンス、取り組み、アピールや押し出しの程度などが、現れてきます。

その元のプログラムはすぐには、分からないにせよ、その「言い回し」に細心の注意を腹って、その「傾向」に「無自覚」でなければ、良いということです。

自分に覚めている、自分の無自覚な心の働きを観照している、すると、さらに爽やかなエッセイになっていきます。

実際、さまざまな色眼鏡や、思いこみのプログラムを除いていくと、心は、ますます本来の感受性を発揮します。今まで気がつかなかった、例えば、通勤途上の美しい町並みだとか、ショーウインドウの飾り付けだとか、雨に濡れて光っている歩道だとか、ああ、なんて、綺麗なんだろう、まるで、外国を旅行しているようだなどと、不思議に思ったり、感激したりします。

ですから、エッセイを書くことは、それだけでも楽しいことですが、上手にエッセイを書き進むことによって、心が磨かれてゆく、そして、もっと、もっと、人生が潤い豊かになっていくということです。

たぶん、人間が人間である最大の特徴は、「言葉を使う」ということなのだろうと思います。ですから、その「言葉」を縦横無尽に使えるのは、人間としての喜びであり、尊さであると思います。

「言葉」は人類の宝ですから、それを大切に活用することは、やはり、少し努力しても、そうした方が、良いのだろうと思います。

【204】 人に読んでもらうというスタンス

(日記とエッセイとの違い)

日記とエッセイはとてもよく似ていますが、一番の違いは、人に読んで貰うことを前提にしているか否かでしょうね。

日記も、エッセイも書き方に決まりはありませんから、自由に書き綴れば良いわけですから、日記とエッセイの中間のような文章もできると思います。

エッセイのような日記も、日記のようなエッセイもできると思います。

では、具体的に一体何がどう違うのかと言いますと、日記には説明義務はないが、エッセイは説明義務があるということでしょうか。

説明義務と言うと分かり難いので、読んでいる人が分かるように書く義務、心遣いと言った方がいいですね。

たとえば、日記で「例の件、行って良かった。ラッキー」とだけ書いても、本人が分かっている以上、それ以上の説明は不用でしょうが、エッセイではそれでは困りますね。どこへ行ったの？ 何がラッキーだったの？ と思ってしまいます。読む人に何を書いて伝えたいのか、それが分からなければならないということです。今度は、「読む人が分かることが必要」ということの代表として、手紙やメールと、エッセイとの比較を試みましょう。

(手紙やメールとエッセイとの共通点)

手紙もメールも、相手を想定して、相手に分かるように書くということではエッセイと近いものがあります。でも、エッセイではありませんね。どこが違うのでしょうか。

第一は、相手が特定されているかどうかですね。手紙やメールは相手が特定されていますが、エッセイは、範囲が広いですね。

また、手紙やメールは、相手に伝えたい「用件」がありますが、エッセイには、それが無いということでしょうか。でも、「用件」が例えば、「旅に出た感動を伝えたい」という絵はがきの裏の文章などですと、エッセイと似たような感じになることもありますね。

「用件」というのは、普通、連絡事項や確認事項のことですね。エッセイの「内容」というのは、連絡でも確認でもありません。「このように思ったり感じたりしていますが、もし良かったら、共感してください」と言うようなものですから、「共感事項」とでもいうような内容ですね。

この、「もし良かったら」と言う部分が違うのでしょうか。共感することを強要する事は出来ませんから、そのようなスタンスになるというわけです。

【205】 量を書く意義

(書けば急速に上手になっていく)

どんなスポーツでもそうですが、練習すれば、どんどんうまくなっていきます。それは、その競技をするのに必要な筋肉がつき、形、フォーム、スタイルが決まって、プレイに余裕が生まれやすから、さらに、臨機応変に動いたり、考えたりすることも出来るようになってきます。つまり、上手くなるわけです。

書くことも同じです。どんどん書いていると、単語力や、表現力や、考える余裕などが自然に備わってきます。ですから、「量を書く」ということは、実力向上に欠かせないことだと思います。書いていけば、文章は自然にどんどん上手になって行きます。

(視点やアイデアも変化する)

量を書き進んでいると、視点や、アイデアも変化してくることがあります。書くことによって、観察眼が磨かれたり、ふとしたアイデアが浮かんだりする機会が多くなるからだと思います。

あることを、文章にしている、「ああ、どうしてもうまく書けない。何か、いいアイデアはないかしら」と思いながら、ペンを置いて、就寝したとします。すると、「夢」の中で、良いアイデアを得られたり、起き抜けに、「あっ、そうだ。良いことを思いついた」と飛び起きる事もあります。

つまり、紙に向かって、色々試行錯誤したり、アイデアを出そうと七転八倒していることが、結局、「気がかり」のデータとして残っていて、「夢」の作業で、他のデータとシャッフルしたときに、思わぬ良いアイデアを得られたりするということなのかもしれません。が、とにかく、単に「頭」で思っているよりは、文字にして見たり読んだりした方が、データとしてはより、気がかりデータになりやすいのだろーと思います。

(文章は必ず上手くなる)

文章は、上手い方が良いですが、文章を上手くすることばかり気にかけてはいけません。文章は、放っておいても、書き進んでいるうちに、自然に上手くなります。

これは、私もそう思いますし、そのようなことを書いてあるのを読んだこともあります。確実にそうなると思えると思います。

ですから、文章の上手い、下手は余りに気にせずに、どんどん書いてください。

とにかく、量を「書く」ことが大切です。

一度に沢山は書けませんから、毎日、少しずつ書くということが、大量に書くコツと言え、コツですね。

「課題は、一編だけだから、一ヶ月に一編書くのだ」と言うのではなく、例えば、「3日に一編書いて、月に10編、その中から、1編を選んで提出しよう」というくらい、大量に書く方が上達は早いです。残りの、9編は自分の貴重な財産になります。

【206】 起承転結の変形

(起承転結は同じ長さではない)

起承転結が、整然としていた方が読みやすことは、確かですが、それに余りこだわることはありません。

また、「起・承・転・結」と、区別がはっきりしていない文章になる場合も多いです。

「起承転結」が曖昧な文章でも、とても味のある文章であることもよくあることですから、それをあまり意識しなくていいと思います。

ただ、書くときは、余り意識しないで書いても、出来上がりが、ちゃんと「起承転結」になっていることはあります。それで、とても良い出来なら、それももちろんOKです。

(変形でもOK)

少しヒントをお話ししますと、「起承転結」の「起」の部分の長短でずいぶん雰囲気が変わってきます。極端に短くすると、導入の説明が無く、突然話の中身に入っていくようになりますから、「意外性」「芸術性」「緊張感」などが高まることがあります。

『その時、彼は、ゆっくりとうなずいて、呻くように言いました。……』
などと、始まる文章は、何の説明もありませんから、いきなり、その状況に引き込まれてしまうというのがあります。

「誰だろう、彼って？ なんとやったのだろう？」と、まず興味を引いておいて、状況の説明は、後で順々にして行く方式です。推理小説や、短編小説などに多い手法ですね。

逆に、状況説明をしっかりと始めると、話は分かりやすくなります。

『その日は朝からとても、風の強い日だったので、私は、念のためにマフラーも持って行くことにしました。……』

とか、

『旅は道連れ世は情け、ともうしますが、云々……』

とか。

私の経験で申し上げれば、一つのエッセイを書き始める場合に、どうしても、最初は、この「起」の部分の長くなってしまいますね。それは、「起」の部分を書いているときは、自分自身で、今から何を書くのかを、どう書くのか、それを規定しながら、絞りながら、書いている状態ですから、自然にその状況説明が長くなってしまふのだらうと思います。

極端な場合は、その最初のプロットを読めば、全体の流れも構成も要点も分かってしまうような場合もあります。要約になっている。あるいは、説明過多になっている。

そのような場合は、思い切って、その最初のプロット（段落）をプロットごとばっさり削除したりします。

すると、自分では、「これでは突然、話が始まって分かり難いのではないかしら」と思いますが、意外に、テンポが良くなって、しゃきとした良い文章になったりします。

前に、不要なプロットは、プロットごと削除してみましようと言いましたが、この立ち上がりの「起」のところにも、それを適用して、削除したということかもしれません。

「起」のところのプロットを削るのは、土台が無くなるようで、不安なのですが、試しにやってみてください。案外面白いですよ。最初のプロットが削られると、次に来る文章に多少の変更は必要でしょうが、あまりその作業をしなくても、立派に作品として成り立つ場合も多いですから、実験してみてください。

すごく、おしゃれになったり、粹になったりする場合も多いです。

あと、同じように、意外に効果的なのは、最終のプロットをばっさり削り落とす方法ですね。それまでの内容で、十分に味わいがあるものなら、最終のプロットを言わない方が、余韻があつて良い文章になったりします。いろいろ実験してみてください。

一番言いたいことを、「あからさまに言わないで」余韻として残すという方法です。

言い過ぎないということでもあります。

【207】 紀行文とエッセイ

(旅の説明と気分の説明)

エッセイの一つのジャンルに、紀行文というのがあります。旅行記、旅日記などもそうです。自分の日常と異なった文化や、風物がありますから、それらを書きとどめていくだけでも、楽しいですね。

遠い外国などに行くと、風俗、習慣、はたまた人々の感性までも違いますから、驚く事も多いですし、感心することも多いですね。

それらを、素直に、表現するだけで、良い紀行文になることも多いです。

その場合、やはり、書き手の「自分」が現れないと面白くありませんから、自分の気持ちや感じたことを書くということになります。

(自分の目で見て感じたこと)

紀行文は、旅行ガイドではありませんから、どこどこに美味しいお店があって、どこどこのおみやげは、種類が多いとか、景色はここから見るのが美しいとか、旅の案内になっては面白くありません。

自分の「感じたこと」を表現するのに、旅の説明は必要ですが、そちらが多くなると、「退屈」になってしまいます。「旅行ガイド」化するからです。

ちなみに、「旅行ガイド」は、今からその地に旅行しようとしている人にとっては、とても興味深い、情報のいっぱい詰まった読み物ですが、その場所や旅行に興味のない人には、どちらかという退屈な読み物だと思います。

にもかかわらず、エッセイとして、紀行文が一つのジャンルを構築しているというのは、その場所での、作者の体験、経験、それに伴う、感激、感情などを、共有したいからだろうと思います。

つまり、そこにやはり、「作者」が表現されているからです。それが必要です。

そのためには、自分の目で見たこと、自分自身が体験したころ、肌で感じたことを書く、ということになります。

(人の心とのふれあい)

文字情報であるエッセイで、景色とか、大きさとかは、言葉を連ねて表現しても、なかなか、上手く表現できませんね。

では、写真の方が情報量が多いのかというと、そうでもありません。写真は写真です。

人の気持ちや、親切や、優しさ、暖かさは、写真では、なかなか表現出来ません。

それができるのは、やはり、文字ですね。文章です。

ということは、「紀行文」が「旅行ガイド」から一線を画するのは、この「人の心」の表現の存在
ということができます。例えば、どのように人の親切が心に染みたとか、忘れていた人間の優し
さや強さを思い出したとか。

そして、その多くは、人とのふれあいですから、結局、旅に出て、人とのふれあいを「温かい気
持ち」で書けば、良いエッセイになるのだということだろうと思います。

もちろん、それには、自分自身が人々に対して温かい気持ちを持っていることがポイントになり
ます。

【208】 自分らしさの表現方法

(自分とは何か)

いきなり、「自分とは何か？」と問われても困りますね。自分らしい作品を書いてくださいと言わ
れても、困ります。個性を發揮してくださいと言われても、さらに困ります。

「人のマネはしないでください。自分らしく個性を發揮して」と言うのは簡単です。
確かに、その通りなのでしょうが、いきなりは、難しいですね。大家になれば、個性も確立して
くるのでしょうし、人のマネもしないで、独創的な作品になるのですが、なかなか、いきなり、
そのようにはなりません。

私は、絵が好きですから、様々な天才画家達の画集を見るのが、好きです。時々美術館にも行
って、本物も見ますが、いつも行くわけには行きません。また、画集には、美術館では見るこ
の出来ない作品も多く収録されています。

例えば、ゴッホの画集を開いてみると、作品が年代順にならなくて、初期には、ルノアールと
か、日本の葛飾北斎だとかの、模写が沢山のっています。ゴッホはルノアールや葛飾北斎が好き
だったようです。

また、ルノアールの画集を見れば、ルノアールも初期の作品には、たくさんの模写があります。
確かダヴィンチの模写もあったように思います。他の、大家もほとんどそうです。沢山の模写を
残しています。

何が言いたいのかと言いますと、大家は誰でも、最初は、積極的に「模写」しているというこ
とです。模写は、練習にはとても良いのです。

しかし、「本物そっくりの偽物を作って人を騙してお金を儲けよう」という「模写」つまり「偽物
作り」は悪いことです。そうではなくて、構図や色使いを見習おうとする「模写」は技量向
上にはとても良いことだということです。

ですが、例えば、ゴッホが模写したルノアールの絵は、絵柄は「ルノアール」なのですが、タッ
チや、色彩は、どうみても、その時点ですでに「ゴッホ」なのです。つまり、ゴッホがルノア
ールを「模写」したというのが、一目瞭然なのです。明らかに、ゴッホがそこにいるわけです。

私も、絵を描き始めた頃は、セザンヌの絵を模写したりしましたが、一生懸命マネをして描いて
も、決して同じにはなりませんね。どうしても、ここは、このように描きたいとか、このように

塗りたいとかの気持ちが、内側から出てきます。写真のように模写するつもりでも、そうなりません。模写が下手だと言えそうですが、そのどうしても出てきてしまう「自分」があるということです。隠せない自分があるということです。

ですから、「個性を出してください」とか「自分らしさを表現してください」と言われても、それはなかなか難しいですが、逆に「個性を出さないでください」「しっかりマネをしてください」と言われても、それもなかなか難しいということです。

ですから、これを逆手に取って個性を発見することができます。

「自分の個性」が分からなくなったら、思い切り誰かのマネを試してみる。その場合、なるべく好きな作家の方が良いと思いますが、その作家の表現方法から、文体までそっくりマネを試みることをおすすめします。すると、どうしても「そっくりにならないところ」が出てきますから、それが、とりもなおさず、発見しにくかった自分の「個性」なのだということになります。

(好ましい自分、好ましくない自分)

個性の話をもう少し続けますと、自分で自分を好きになっている部分と、そうでない部分があると思いますが、エッセイを書くときは、なるべく、「好きな自分」の立場で書いてください。ありのままの自分でももちろん良いのですが、そのありのままの自分のうち、「好ましい自分」「好きな自分」の側に居て、その立場から書くということです。

逆は、「駄目な自分」、「嫌いな自分」の立場から書くということになりますが、それは、読む人も面白くないですし、書いていて、自分の修行にもなりません。

例えば、「私は、すごく優しい人」「私は、飛びきり素敵な人」「私は、とっても可笑しい人」「私はとても修行の進んだ人？」なんでも、いいです。とにかく自分はとても良い人だと思って、紙に向かってください。

これは、練習ですから、練習すれば出来るようになります。

それでは、内容としても、「失敗したこと」や「ドジをしたこと」を書かない方が良いのではないかと思われるかもしれませんが、内容とは別です。内容は内容、書くポジションは書くポジションです。書く立場は、「好ましい自分」の立場で書きましょうということです。

例えば、「失敗したけど、修行になった。それを乗り越えて明るく生きよと思った」と言うのは、「好ましい自分」の立場だと言えますが、「失敗して立ち直れない。今もあいつを恨んでいる」とかは、自分でもきっと「キライな自分」、「好ましくない自分」だと思いますから、そのような立場では書かないということです。

このようにはっきり分かる場合は、簡単ですが、中には、どの立場が微妙な場合もありますね。その微妙な場合でも、一ミリでも、「好ましい自分」に近づくように、ものを見て、ものを考えて、書きましょうということです。それを忘れていなければ、自分は自然に磨かれていきます。

【209】 面白いエッセイ

(面白くないエッセイ)

面白いエッセイとか、面白くないエッセイとかについてお話しします。

まず、面白くないのは、何を書いてあるのか、分からないエッセイ。当然ですが、面白くないですね。

でも、結論が見えているエッセイも、読んでいて面白くないですね。

ほかにも、面白くないエッセイはいろいろあると思いますが、一言で言えば、読む元気がなくなるようなエッセイは、面白くないということのようです。

では、どのような時に、読む元気が無くなってしまうのでしょうか？

(批判は聞きたくない)

まず、第一が、「批判」や「非難」が沢山でてくるものですね。

批判している本人は、「憤懣やるかたない」「腹に据えかねる」と思っているのかもしれませんが、それに、なかなか同調できないことも多いです。

また、同調したとしても、自分も一緒に気分が悪くなったりしますから、「批判」が多い文章は、敬遠してしまうのでしょうかね。読み進む元気がなくなりやすいです。

(威張っているのも聞きたくない)

その次に、読み進む元気がなくなるのが、「威張っているもの」ですね。

しかし、これは、人の文章を読むと、すぐに、「ああ、この人は自慢している」と分かりますが、自分が自慢して書いている文章は、なかなか気がつきません。

自分では、威張っているつもりはないのですが、そうなっている場合が、結構あるということです。

その予防、発見方法は、「この文章を読んだ人が、どう思うだろうか」とチェックしてみれば分かりやすいですね。このように、言われたら、自分だったらこう思うかもしれないと言うチェックの仕方でも同じです。読む側の立場にたって、もう一度読み直してみると言うチェックを入れてください。

自分の文章を声を出して読んで見ると、他人の立場に立ちやすいですから、どうしてもと言うときは、声を出して読んでみると良いかもしれませんね。

最近では、音声入力ソフトというのがありまして、「ドラゴンスピーチ」とか「IBMのビアボイス」とか、いろいろ製品が世に出ています。これらを使うと、ワードやメモに書いたパソコン上の文章を読み上げてくれますから、耳で聞いてチェックする作業を、人に頼らずにすることができそうです。もし、興味がおありでしたら、検討してみてください。ただ、まだ、発展途上ですから、完成度があまり高くないので、変な読み方をする場合も少なからずありますけど。

【210】 プライバシーの保護

(プライバシー保護は常識)

最近、プライバシーの保護について、関心もたかまり、法令も充実してまいりました。公に発表する可能性のある文章を書くときは、誰かのプライバシーを侵害していないかどうか、常にチェックするようにしましょう。

(相手の立場になって考える)

プライバシーの保護については、細かい法令はありますが、基本は、「もし、自分が同じことをされたら困る」と思えることについては、書いたり発表したりしないということです。相手の立場にたって考える。

しかし、他人の立場にたって考えても限界があります。「非難するのはいけないと思ったが、賞賛しているんだからいいじゃないか」と自分勝手に思っただけではいけません。そのことに触れられるのが困るという場合だってあります。ですから、究極は、特定の個人や団体が推定できないような書き方をすることになるかと思えます。

これは、日記やレポートとは、ずいぶん違う点ですね。

(宝彩有菜)

以上で、2回目のテキストを終わります。

(第2回目の課題)

第2回目の課題 「あの時の私」 または、「自由課題」(1200字以内)です。

2回目は、少し文学的要素を入れて書いてみましょう。景色や、動作、表情、しぐさなどの表現にも工夫を凝らしてください。

「今の私」とか、「その時の私」でもいいです。時間の前後の経過も少し入れて、愛や勇気、許しや、受容、人間や心に関するテーマについて、自由にお書きください。紀行文などでも、中心テーマが「私の心」や「私の気持ち」であればOKです。

(題名の例：)

「校庭の水まき」
「夕日を見て泣いていた人」

「お母さんのエプロンの匂い」
「親切が心にしみた港」
「すり切れた定期入れ」
「目頭がジンときた鍋」
「穴のあいた毛糸の手袋」
「神棚に上げたもの」
など。

それでは、第2回目の作品を楽しみにお待ちしております。

宝彩有菜

◆宝彩有菜の「エッセイ講座」のHP
<http://homepage3.nifty.com/hosai-pj/essay/memb-index.htm>

(C) All copyrights reserved Alina Hosai 2005